HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ササの利用とササ地の取扱い
Author(s)	川瀬, 清
Citation	北海道大学演習林試験年報, 1, 38-38
Issue Date	1984-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72615
Type	bulletin (article)
File Information	1982_1-17.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

I—17　ササの利用とササ地の取扱い

川　瀬　　清

この研究は1968年研究部で発案し，雨竜地方演習林の力強い協力の下に母子里地区の418林班で開始された。高さ約3mのチシマザサをブラッシュカッターで刈払い，結束して枝葉部を切除してから工場まで運搬し，パーティクルボードの原料として販売した。1 ha当りの採取量は1968年が30.9t，1969年41.9t，1970年44.8tと次第に高くなっていて，3年間の平均は39.2tとなる。ササ稈は根元が太く肉厚なので刈払うときの高さが低いほど収量が多くなる。ササ地の刈払いは長さ100m，幅を5，10，20mの筋刈りにし，刈り幅と同じ幅を筋状に残した。1t当りの採取・販売に要する費用は刈払い，結束，集荷に10,900円，工場までの運搬費1 500円で合計12 400円であった。ササの刈払い跡地は林木の更新を促す目的で落葉落枝除去，表土掻起しなどの処理をしたが，その費用は1 ha当りそれぞれ19,200円，28,800円であった。

これら一連の作業を林木の天然更新補助作業と考えると施業区域1 ha当りの刈払い面積は0 5haとなる。したがって施業区域面積1 ha当りのササの採取・販売に要する費用は12.400円×19.6（t）＝243,040円で，販売によって上る収入は7,500円×19.6＝147 000円となり，作業による出費は差引き96,040円となる。すなわち1 ha当り10万円足らずで更新補助作業ができ，落葉落枝を除去しても115,240円，さらに表土を掻起しても144,040円にすぎない。

こうした筋状の施業地はたけのこの採取には好適である。そして15年後のダケカンバを主とする林木の更新状態をみると，この施業方法はササ地の取扱い方として合理的であり，有用なササ地の施業方法である。最近，多雪地帯のトドマツ一斉造林地では枝枯病が多発し，大面積が被害を受けており，418林班のササ試験地に隣接したトドマツ造林地にもそれがみられ，とくに下刈りに代るカンバ類の枯殺造林地では，ほとんど全滅に近い被害を受けている。しかしササ試験地内では広葉樹の下にトドマツも更新し，いずれ混交林になるという期待ももてる。このように現在の森林資源を活用しながら，しかもそこに林木の更新をはかることのできる施業は，地拵え・人工植栽という1 ha当り数十万円もかかる多額の費用をかける造林方法にくらべ，有利な点が数多くあるので，今後とも積極的に採用すべき施業方法の1つであると思われる。

一方試験地の調査にはラジコンヘリコプターにカメラを装着して200m程度の低空から写真を撮影する方法（氏家・笹木両氏の発案）を採用したが，この方法によると詳細度の高い写真が容易に撮影でき，立体視することにより幼樹や大型草本類などについてもくわしく観察することができる。この方法は気球による空中写真と共に，今後は造林地などの調査には威力を発揮できると思われる。北大のような大面積の森林を小数の職員で管理しているところでは，新しい合理的な方法を積極的に採用して，業務の改善をはかることが望ましい。

一方，ササの利用方法も，今まではササのみで利用する方法が研究されてきたが，適量を木材と混合して活用する方法を確立すると，ササの資源としての活用範囲が広くなるので，そうした利用方法の研究にも力を入れている。